

長崎くんちに参加して（2）

長崎史談会 幹事 平山次男

8日(中日)、今博多町は3番町。前日が1番町であっただけに、やはり本踊りのルーツである今博多町が、本番中は常に1番町として奉納することが最もふさわしい、と思う。早朝の静寂かつ厳粛な奉納の幕開けは、やはり厳かな「鶴の舞い」が一番よく似合う、と思うからである。

八坂神社、公会堂前広場での奉納後は、ひたすら中央公園などを含む庭先回りに徹する。途中の休憩時、シャガリの一人と話す機会を得た、「現在、シャガリ連合組合には52名の同朋がいるが、継承者が育たないとバイ…」、「時には若者が入会してくれるが、静止状態の時には笛は吹けても、歩きながら吹くのが難しかと、息が洩れるけんね。それに石畳(雨で濡れていても)に直接座って練習するのも耐えられんとやろね、いつの間にか辞めて行くどバイ…」と、先行き不安を語った。単について歩くだけでも大変なことと実感しているので、辞める人の気持ちが解らないでもないが、この国指定重要無形民俗文化財を守って行くためにも後継者が育っていくことを心から願った。事務局に帰り着いた時、0幹事が万歩計を見て、「わぁー、3万歩を超えちよるばい…」と叫んだ。

9日(後日)、長く感じた「くんち」も“今日が最終日”と思うと気合いが入る。早朝から出店で賑わうお旅所、諏訪神社での奉納後、また庭先回りへと続く。途中、長崎くんちのフィナーレを飾る「お上り」をお見送りする。神輿守町の若者に担がれた神輿が秋空に晴れる。

庭先回りはさらに続き、“くんちは修行の場だ”という心境になる。街中の隅々まで回るために初めて歩く路地もあり、“まちなか再発見”でもあった。

最後の庭先回りとなる浜町アーケード街を終わったのが、午後7時過ぎ。それでもアーケード中心部には大勢の観客が、「ショモーヤレー！」の声を掛けながら待っている。その観客に取り囲まれようとして、笑顔で最後の力を振り絞って舞う6羽の鶴の姿が痛々しく見え、つい目頭が熱くなった。

後日の予定を無事に終え、帰町の途中にある「編笠橋」まで来ると、暗闇の中に無数の提灯の灯が見えた。我々を出迎える町内の人たちであった。その優しい心遣いに、また熱いものが込み上げてくる。齢を重ね感動する感情が希薄になっている昨今、熱い思いを甦らせてくれた「長崎くんち」に、“ほんとうにありがとう。そしてお疲れさーま!”、と心の中で叫んだ。 以上

